

巻頭言

就任ご挨拶



MURAKAMI Yosuke

動物衛生研究所所長 村上 洋介

動物衛生研究所は、これまで動物衛生問題の改善を通じて家畜生産の損耗防止と安全な畜産物の生産に貢献することを目的に、基礎研究から応用研究まで幅広い分野の研究活動を行うとともに、衛生問題の解決のための技術的な対応や提言、病性鑑定、研修・講習を通じた内外の獣医技術者への最新技術と知見の提供、防疫に必要な生物学的製剤の製造・配布などの業務を行ってまいりました。当研究所の起源が明治24年の農商務省仮農事試験場に獣疫研究室2室を開設したことにあるとすれば、私どもは諸先輩からその輝かしい研究業績とともに上記業務を引き継いで今年で117年の歴史を刻むことになります。

さて、このたび本年4月に動物衛生研究所所長を拝命いたしました。独立行政法人化後7年が経過し、わが国を代表する動物衛生領域の公的研究機関として、その真価を問われるこの時期に動物衛生研究所所長を仰せつかり、責任の重さを痛感しています。

ところで近年、わが国をはじめ世界の動物衛生をめぐる情勢はかつてないほど大きな変化をみせています。背景には食料需給の逼迫や人や物の流通の促進、さらには地球温暖化などが複雑に関係しているのかもしれませんが。例えば、口蹄疫、豚コレラ、ニューカッスル病およびアルポウイルス感染症などいわゆる越境性動物疾病と呼ばれる疾病は世界の広域にまん延し、その防疫は清浄国と汚染国の双方に共通の重要課題になっています。また、食の安全性に関わる関心の高まりを受

けて、牛海綿状脳症(BSE)や高病原性鳥インフルエンザなどの人獣共通感染症の制圧や、飼料や畜産物を汚染する有害微生物および有害物質のリスク低減などの課題も各国の重点施策とされています。さらに、わが国においては飼料をはじめとする畜産資材費が著しく上昇しており、農場に常在する複合感染症や生産病などの慢性疾病対策は食料の安定供給と生産性向上を目指す畜産業にとって益々重要な課題になりつつあります。

このような近年の動物衛生を巡る情勢変化を踏まえ、動物衛生研究所では第2期中期計画において、内外の重要な動物衛生問題の解決を目標として11の研究課題を掲げてその達成に取り組むとともに、職員それぞれの専門性を活かし様々な技術サービスの提供に努めています。また、産業界との間では動物用医薬品等の開発に関わる多くの共同研究を進め、さらに大学との間では連携大学院制度を活用して獣医学分野における研究者の人材育成にも着手しています。

動物衛生研究所は、「動物をまもる ヒトをまもる」を基本理念として、公的研究機関として効率的な運営に努め、動物衛生をめぐる内外の情勢変化に対しても機敏かつ柔軟に対応し、健康な産業動物を生産し食の安全性確保に寄与するため上述の任務(ミッション)を達成してまいります。関係者の皆様のご支援と、諸先輩並びに職員の皆様のご協力を得つつ、研究所運営の責務を果たすべく全力を尽くす覚悟です。どうぞよろしくお願いいたします。